

地域資源をリソースとして活用した留学生向け日本語教材の 開発と実践についての一考察

——2021 年弘前大学サマープログラム日本語コースの事例——

高橋 千代枝

【要旨】

本稿は、弘前大学国際連携本部で行われた 2021 年留学生向けオンライン短期日本語日本文化プログラムである「2021 年弘前大学サマープログラム」において、「弘前大学に留学を希望する留学生を増やす」という目標のもと、筆者が開発した「日本語コース」の中、青森県津軽地方に存在する歴史的文化や、弘前大学、弘前大学の学生たちなどを、日本語を学ぶ「リソース」（トムソン木下 1997）として活用し、教材開発と実践を行ったうちの一部を報告するものである。教材の開発に当たり、世界的にも有名な弘前城の桜や津軽塗、また、現在弘前大学で学ぶ弘前大学生の動画教材への参加と、大学内の施設、そこで働く人などを、教材に取り入れることにより、本プログラム受講者が津軽地方に興味を持ち、将来的な留学先として弘前大学を選ぶきっかけになるように心掛けた。事後アンケートの結果からは、上記の目標にかなうような留学生の反応を得ることができ、地方の歴史文化などを教材の「リソース」として取り入れることの効果が示されたと言える。

キーワード 日本語教材 地域文化資源 リソース オンライン教材

1. はじめに

2020 年 1 月頃から世界中で感染が拡大した新型コロナウイルスの影響により、大学の授業はそれ以降、従来対面で行ってきた授業をすべてオンライン授業に切り替えることを余儀なくされた。本学も例に漏れず、「メディア授業」と称して、すべての授業をオンライン化し、リアルタイム生配信かもしくはオンデマンド教材の配信をして、授業の代替とすることとなった。

筆者は 2021 年 4 月に本学国際連携本部に着任し、留学生の日本語授業担当として業務を開始したが、当時本学では一部の留学生を除き留学生の受け入れを中止しており、特に半年から 1 年間の短期留学プログラムの受講者としての海外の提携大学からの交換留学生の受け入れは全面的に中止され、授業の準備も間に合わなかったことから実質交換留学生向けの日本語日本事情科目の授業は停止の状態にあった。

この状況を何とか打破しようと国際連携本部で国際連携本部教員であるサワダハンナジョイ氏が中心となり企画したのが、2021 年 1 月～2 月に渡って実施された「2021 年弘前大学ウインタープログラム（以下、ウインタープログラム）」であった。筆者は、このウインタープログラムにおいて行われた 3 つのコース（「津軽歴史文化コース」「現代日本文化コース」「日本語コース」）のうちの、「日本語コース」を引き継ぐ形で、サマープログラムの開発、実施を担当することになった。

サマープログラムは、ウインタープログラムの実施後に行われた受講者アンケートの反省に基づき、プログラム内容を全面的に改訂することになった。このことについては、紙幅の関係で別稿で述べる予定であり、本稿では詳細を述べないが、本学国際連携本部の方針である「弘前大学の国際化を推進する」目的のもと、「留学生の日本語能力（特に初級者）の向上に資すること」と、「弘前大学への留学希望者を増やすこと」という 2 つの目標を掲げ、教材の企画・開発に当たった。

本稿ではこのサマープログラムの日本語コースで使用した教材について、トムソン木下 (1997) の言う「教室から学習者を開放するリソース」としての教材の考え方と、コロナ禍でいわば「急ごしらえ」(岩崎 2021)で準備して行われた大学授業の中で「再認識されたオンライン教育のメリット」(国立大学協会国際交流委員会 2021)の考え方の 2 つの側面から、弘前大学に関係する人やモノや地域歴史文化資源を活用して作成した教材が、受講生の日本語学習にどのような影響を与えたかを考察する。

2. 教材分析の 2 つの視点

本節では、サマープログラムで開発・使用した日本語コースの教材について分析・

考察するための2つの観点についてまとめる。

2.1 大学における ICT 活用について

岩崎(2021)は、コロナ禍以前の日本においては、「大学の多くは、授業を補助的に支えるための ICT 環境や教員や学生による LMS の利用はあるものの、オンラインですべての授業を行うための ICT 環境の整備、教員の ICT 活用能力が十分であるとは言えない状況であった」と述べ、Covid-19 の世界的パンデミックにより、「大学の教職員は短期間で準備をし、急ごしらえのオンライン授業を実施した」と述べている。従来、大学の授業における ICT の活用は、「主体的に考え、生涯学び続け、未来を切り開いていく力を育成した学生を輩出すること」(岩崎 2021)を目標とし、「そのための手立ての1つとして(中略)アクティブラーニングを導入し、反転授業、LMSやリッッカー等、従来から ICT を活用した対面授業を行って」いるが、「これらはあくまでも授業の補助的なツールとして利用されることが主流」であり、リアルタイム配信であれ、オンデマンド教材の配信であれ、ハイフレックス形式であれ、授業そのものをオンラインで実施することは、コロナ禍以前には考えもしなかったことであろうと思われる。

しかし、今回のコロナ禍により大学授業のオンライン化が開始され2年ほどが経過する中で、大学の授業をオンラインですることのメリットやデメリットが各方面から検証されるようになり、今後の大学教育は学習者を主体としたよりアクティブな学びの仕掛けを提供する形のオンライン授業の活用がさらに増加するのではないかとの意見が出始めている。特に、日本人学生の海外留学については、オンライン化のメリットとして、「海外の学生とのディスカッション等を含む授業実施などへのハードルが下がったこと、家計の状況に関わらず、海外の学生との共修環境を構築することが容易になったこと、就職時期や自大学のアカデミックカレンダーに影響されずに海外大学の授業を履修できることおよび、良質な高等教育の提供が可能となるなど格差を是正する一面も挙げられる」(国立大学協会国際交流委員会 2021)との見解が発表されている。このメリットは、経済的に「留学」自体が難しかった日本留学を希望する外国

人学生にもあてはまることであり、大学授業が全面的にオンライン化することによって、国や時差を超えて大学での学びを提供できるようになった点が大学授業のオンライン化のメリットの大きな部分を占めていることが示唆されている。

本稿で報告するサマープログラム日本語コースは、対象者の国籍が中国、台湾、韓国、タイ、ロシア、チリ、アメリカ、カナダと時差がある学生が同時に履修したため、リアルタイム配信でオンラインでそろって授業を受講することは不可能であり、オンデマンド教材を配信し、課題を提出するという形での実施となった。「国や時差を超えて大学での学びを提供する」という点で、オンライン授業のメリットを見込んでの教材開発となった。

2.2 「リソース」を使用した教材

トムソン木下(1997)は、「教科書に代表される「教材」は、教室活動を中心として開発されてきたと言っても過言ではないだろう」として、留学生向けに開発されてきた教材は、対面による教室での使用を想定して作られていることを指摘している。そのため、従来の留学生向け日本語教材は、教科書であれ、視聴覚教材であれ、問題集であれ、いずれも「教室での日本語使用」のために作られている点を問題点として挙げている。

しかし、現在世界では、経済界を中心に、世界的に活躍する「グローバル人材」の育成が求められており、グローバル人材には、「異文化間コミュニケーション力」、「異文化適応」、「異なる価値観への配慮」(Lee, 他 2012) や、「創造的考察力」(Stebbleton 他 2013)、「積極性・行動力」、「目的を達成する力」、「問題解決力」(小林 2015)などの「異文化コンピテンシー」が必要だと言われている(末松 2017)。このことを鑑みるに、これからの日本語教育が目指す人材の育成は、まさにこのような「グローバル人材」であろうと思われる上、従来の日本語教材が、「教室での使用」を前提に作られているとすれば、新たに作られる教材は、「実社会での日本語使用のための学習」のために作成されるべきであり、「実際の日本語使用に役立ち、また日本語使用の対象となる「リソース」」(トムソン木下 1997)を活用したものであるべきだと考えられる。

ここでトムソン木下 (1997) が言う「リソース」とは、「学習者を教室から解放」するものであり、例えば、「新聞」、「日本人の友達」、「雑誌」、「テレビ」(田中・斎藤 1993) や、「街頭の一般日本人」(田島 1995)、「(海外の) 日本料理店」、「土産物店」など、学習者の日本語学習に役に立つモノすべてが日本語学習の「リソース」となる、という考え方である。

日本語教育の分野では、このような考え方のもと、学習者を大学や日本語学校などの「教室」から解放し、学習者に日本の生活や実際の日本文化などを体験させるような活動が多く行われている。特に、歴史・文化資源が豊富な地域では、それらを「リソース」として、学習者の学びに役立てようという試みが盛んである。

例えば中島 (2013) は、中島が所属する鹿児島大学のある鹿児島市内を探索し、「地域を学ぶ「多文化間プロジェクト型協働学習」」の実践を行っている。当プロジェクトでは、「鹿児島の歴史・文化・くらし等について、プロジェクトワークを通して学び、理解を深める」ことを目標の一つとし、留学生と日本人学生の混成チームが、鹿児島市内で調査を行い、調査結果をまとめ発表するという活動を行わせている。調査の対象は、全国的にも有名な「桜島」「仙巖園」をはじめ、「桜島の農家」、「薩摩焼窯元」、「大島紬工場」、「薩摩切子」など、伝統文化や地元の産業の他、「ホテル」、「ショッピングセンター」など、一般的な生活の場であるものも含まれている。

中島はこのプロジェクト終了後の留学生の感想として、「鹿児島の歴史だけではなく、日本の明治維新についてもいい勉強になった」や、「鹿児島の伝統的な芸術品—薩摩切子と薩摩焼を見学して、日本の歴史を学び、鹿児島への愛が深くなってきた」などを挙げ、「鹿児島への関心の広まりは今後の学習意欲を促進し、学習の継続を促す契機となるものと思われる」と述べている。

また、内丸 (2013) は、岡山大学において、地域の文化・産業に根差したトピック（日本刀、ジーンズ、学生服、団扇と扇子、そうめん等）をとりあげ、中級後半〜上級の留学生に対して行った文化クラスについて報告している。このクラスに対する留学生の感想として、「岡山についてすごいふかく、いろいろのことについて知りことができ、良かったと思います（原文ママ）」や「地元の人が多かったので、岡山につい

て深く知ることができた」などを挙げ、「今後、地方大学がその特色を打ち出しながら短期交換留学生の受け入れを拡大していく上で一つのアピールになるかもしれない」と述べている。

以上、2つの大学の取り組みは、まさにトムソン木下(1997)の言う「学生を教室から解放する」ためのリソースとして、地域の特色ある文化や日本で生活している一般の人を活用して行われた学習であると言える。また、このような地域の特色やその地に生活する人をリソースとして学習に取り入れる取り組みには、都会の大学を目指しがちな留学生の目を地方に向けさせる効果があると考えられる。

弘前大学のある津軽地方も、筆者が今回サマープログラムで取り上げた津軽塗や日本一の産地であるリンゴ、その他特色のある農産物の他、ねぶたまつり、金山焼、こぎん刺し、津軽びいどろ、津軽三味線等、外国人にとっては大変魅力的な資源が豊富な地域である。人口減少や過疎、労働力不足に悩む地方都市のひとつとして、これらの資源を活用し、地域と世界を結ぶ懸け橋となるような人材の育成が今大学に求められていると考える。

次節で、実際に留学生向け短期オンラインプログラムの中で、以上のような地域資源をどのようにリソースとして活用したかを、実際の教材を示しながら説明する。

3. 「リソース」を活用した日本語教材の開発と実践

本節では、2021年サマープログラムで使用した日本語コースの教材を示し、その開発に当たって工夫した点と、各教材の問題の中で、受講生⁽¹⁾にどのようなインパクトを与えることを意図したかを述べる。

3.1 弘前大学と弘前大学大学生を「リソース」とした教材

サマープログラム日本語コースは、第1課「簡単な自己紹介」から「第8課面白い自己紹介」まで全8課で構成されている。ここで使用した教材は、動画とそれを見て答えるワークシートで構成され、週一回MSチームズにアップされる短い動画を見て、

動画の内容についての言語的・内容的な問題に答える他、「タスク」として、動画の内容を発展させた調べ学習や動画作成をするようになっている。

本教材作成にあたり、「弘前大学はやぶさカレッジ」の 8 期生である 8 名の日本人学生（以下「はやぶさ生」）に協力を依頼し、教材作成に参加してもらった。本件については、紙幅の関係で別稿で述べることとし、本稿では経緯などについては触れないが、実際の教材の一部を例として掲載し、その問題の意図と受講生の反応について述べる。

3.1.1 第 1 課「簡単な自己紹介」課題

第 1 課のタイトルは「簡単な自己紹介」で、はやぶさ生 8 名がそれぞれ行った自己紹介の動画を編集でつなぎ、番号を付け、その自己紹介の内容についての問題を作成しワークシートとして配布した。

ここでは、まず、はやぶさ生 8 名が留学生の日本語学習における「リソース」となっている。（コロナ禍でなければ留学できたはずの）希望留学先の大学生が教材動画に出演することによって、学習言語である日本語や日本の社会をより身近に感じることができることを意図してこの問題を作成した。図 1 は実際にはやぶさ生が自己紹介をしているところの動画の画像である。

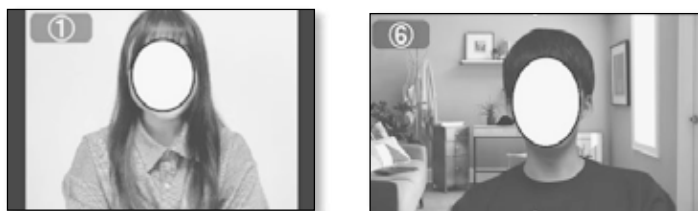


図 1 自己紹介の様子

図 1 のように、はやぶさ生に自己紹介をしてもらい、それを撮影したものを編集でつないで、8 人の自己紹介の動画を作成した。特に筆者から、自己紹介で使うことばや日本語のレベルについて指導はせず、ただ、「学部」、「学年」、「出身地」、「はじ

めまして」「よろしくおねがいします」の「挨拶」を入れるように指示した。このようにして作成した動画をもとに作成したワークシートの一部が以下の図 2 と図 3 である。

図 2 の問題は、はやぶさ生が自己紹介で話した「名前、学部、専攻、学年、出身地、呼び方」について、下の選択肢の中から選んで答えるようになっている。本コースの受講生は初級中～中級下のレベル⁽²⁾であり、日本語の音声になじみがなく、日本人の名前や学部、出身地の名前など、音として聞いてもそれがどのひらがなに当たるのかを認識すること自体が難しい。しかし、大学生の自己紹介として、自分の名前はもちろんのこと、大学名、学部・専攻、出身地、呼んでほしい名前の呼び方などは、言葉話を話す上で最も基本的な要素である。そのため、実際に弘前大学の学生が自分のことについてシナリオなしに自己紹介をするところを見て、受講生ははやぶさ生自体に興味を持ち、なんとかその名前を知ろうとする。また、受講生自身も大学生であるためそれぞれ所属の学部があるが、それを日本語で言う言い方は知らないことが多い。動画で弘前大学の学部の言い方を日本語で聞くことにより、自分の所属する学部は日本語で何というのかということを調べようとするのが期待できる。学年の言い方は初級の段階で学ぶことであるので復習となるし、もちろん受講生が自己紹介するときにも使われる。

そして、出身地については、受講生にとっては当然耳慣れないものである。日本語を勉強していても、「東京」や「大阪」、「京都」など世界的に知られている都市の名前は耳にしているが、東北地方の県の名前を知っている外国人は少ない。そこで、図 3 の問題を作成し、自己紹介を聞いて、この地図の中の 3 つの県のうち、「青森県」「岩手県」「秋田県」がどこにあるのかをクイズ形式で解くような問題を設けた。自己紹介では、「青森県は、本州の一番北にある県です」や、「秋田県は青森県の南にあります」、「岩手県は青森県の右下です」といった方角を表す「東西南北」、方向、場所を表す「上下左右」のことはを使って出身地の場所が説明されている。これらのことは新出単語として学ぶ（または復習として思い出す）ことにより、東北 3 県の位置がわかるだけでなく、ゲーム感覚でクイズに答えるように楽しく問題に取り組むことができるよ

うになっている。さらに、弘前大学の学生8名の出身が、この3つの県であるという

『自己紹介ビデオ1』の1～5を見て、以下の問題に答えてください。 1. ビデオの自己紹介を聞いて、以下の表を作ってください。

1.名前, 2.学部学科, 3.学年, 4.出身は から選んでa-hを書いてください。5.呼び方は、ビデオを聞いて、「ひらがな」で書いてください。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1.名前			e					
2.学部学科		d						
3.学年				c				
4.出身							e	
5.呼び方	51呼び							

☆それぞれ下から選んで記号(a-h)を書き入れてください。

1.名前: a. b. c. d. e. f. g. h.

2.学部学科:
a. 人文社会科学部文化創造課程 b. 医学部医学科 c. 教育学部不学校コース d. 教育学部学校教育実践課程 e. 医学生命科学部

3.学年: a. 1年生 b. 2年生 c. 3年生 d. 4年生

4.出身: a. 秋田県 b. 岩手県 c. 宮城県

図2 第1課自己紹介ワークシート p.2

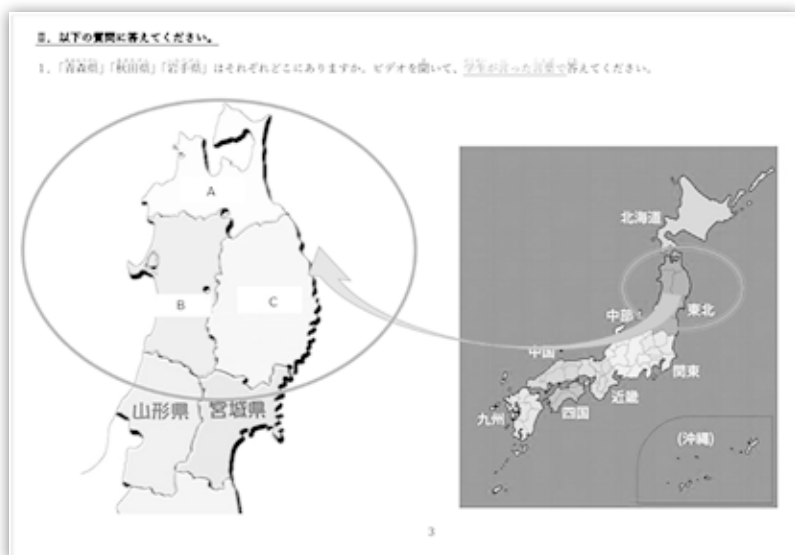


図3 第1課自己紹介ワークシート p.3

ことを知ることによって、弘前大学には、青森県やその周辺の県から来る学生が多いのだということも知ることができ、受講生自身の大学はどうかということとの比較にもつながる。

このように、第1課「簡単な自己紹介」では、はやぶさ生の名前、出身地、学部、専攻、東北地方、県などが日本語学習のリソースとして使われた。これらのリソースを使うことの効果として、受講生が自分自身のことについて、日本語で何というかを考えるきっかけとなり、教科書に出てくる単語を意味もなく覚えるのではなく、実際に自分が自己紹介するときに使う材料として探し集める、という作業につながり、効率的に「自分を表現するための日本語」の使用につながることが見込まれる。

3.1.2 第1課「簡単な自己紹介」タスク

また、第1課では、タスクとして以下のような課題を出した。

受講生は、図4のフローチャートに従って、自分自身の大学名、専攻名、学年、出身、呼び方を日本語で話し、それを撮影して提出する。

受講生は、日本語学習支援者であるはやぶさ生に、自分の専攻を日本語で何というか聞いたり、弘前大学のホームページを閲覧したりして（もしくは、所属大学の日本語教員に聞いたかもしれないが）、このタスクに取り組み、自分の自己紹介を提出した。

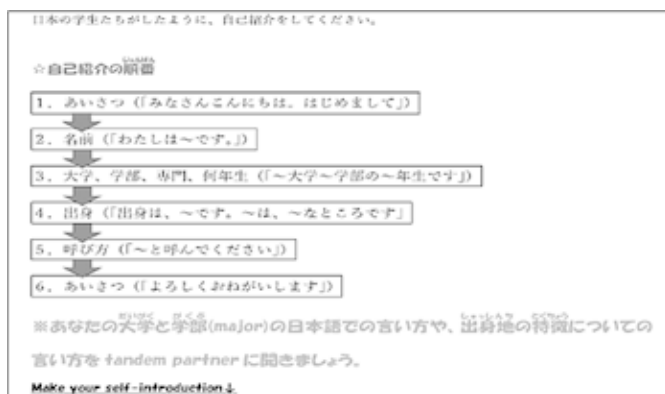


図4 第1課ワークシート p.6

3.1.3 第2課「弘前大学」課題

第2課「弘前大学」では、弘前大学の正門、教室、コンビニ、食堂、購買部、書籍部にてロケを行った。3名のはやぶさ生に出演してもらい、「ここは、どこですか?」「ここは、弘前大学の正門です」、「これは、なんですか?」「これは、弘前大学のお土産です」という、初級者レベルの日本語会話を行ってもらったところを撮影し、編集して4つの動画とした。以下に画像を例として示す。



図5 第2課「大学紹介」動画画像

本課で使われた「リソース」は、「弘前大学」そのものということになる。現在在籍している弘前大学の大学生が、自分の大学にあるものを紹介していく動画になっており、そこで話される日本語は、レベルをコントロールされた受講生にとって理解可能な日本語である。また、動画に付属するワークシートには、動画の中で話されている会話を文字起こししたスクリプトを載せてあり、穴埋め問題や、会話の内容を問う問題となっている。多少聞き取りが難しかったり、知らない単語が会話の中に出現したりしたとしても、ワークシートのスクリプトを見れば、動画に出てくる画像の中で出演者が指差して示しているものの名前だということは認識できる。

以下に、ワークシートの一部を示す。

「大学紹介」のビデオの1～4を見て、以下の問題に答えてください。

1. 「大学紹介」を見て、以下の質問に答えてください。

1. 以下の会話の _____ の部分に言葉を入れてください。

1-1

A: ここは、どこですか？

B: ここは、弘前大学の① _____ です。英語で② _____ です。

A: これが、弘前大学の③ _____ です。

図6 第2課「大学紹介」ワークシート p.1

本課では図7の下にある枠内に、一般に大学生が普段使用する文房具などが選択肢として示されている。しかし、初級日本語学習者にとっては、「モニター」や「マグカップ」、「マウス」、「ファイル」などは、未習の項目である。

このように、普通世界の日本語教育で使用される初級日本語教科書には出てこないような語彙を、サマープログラムの教材では勉強できるようになっている。このことはまさに、「学習者を教室から解放」するものであると考えられることができ、さらに言えば、大学生の生活に身近な語彙であることから、受講生がこれらの語彙を覚えて、（もし留学できた場合）実生活で使うことができるようになることも見込める。

2. 以下の会話の _____ に、 _____ から選んで、言葉を入れてください。

2-2

A: ここには、なにがありますか？

B: 勉強のための① _____ が売っています。

2-3

A: ② _____ や、③ _____ も買えます。

2-4

A: これは、なんですか？

B: これは、④ _____ です。【a. たまたま b. 時々 c. ドキドキ】買います。

A: ここでは、⑤ _____ や、⑥ _____ や、⑦ _____ や、⑧ _____ も、買うことができます。

2-5

A: これは、なんですか？

B: これは、⑨ _____ です。『鬼滅の刃』【d. _____】もあります。

2-6

A: はかにも、大学の⑩ _____ や、⑪ _____ を買うことができます。

a. パソコン b. モニター c. シヤフ d. 雑誌 e. 本 f. ファイル
g. マグカップ h. マスク i. マウス j. 紙皿 k. ノート

図7 第2課「大学紹介」ワークシート p.4

このように「リソース」の考え方を取り入れた教材によって学ぶ日本語学習者は、教科書に出てくる語彙や表現のみを覚えて教室で練習するという学習方法を取る学習者よりも、より実践的に、学習者自身が必要としている語彙をすぐに身につけることができると考えられる。学習効果が大変高いと言える。

また、この第2課では、大学の食堂で働いている従業員の方にも動画に出演してもらっている。その様子を以下に示す。



図8 第2課「大学紹介」動画画像

第2課は、大学生が生活する上で日常的に利用する食堂や売店などを撮影した。サマープログラムの受講生は、海外で外国語として日本語を学ぶ大学生であり、いつか日本に留学したいという希望を持っている。そのような学生にとって、大学の施設や大学の売店で売っているもの、食堂などの風景を見ることは、言語学習の意欲を増幅するものである。さらに、実際に弘前大学の食堂で働いている人たちの様子を動画で見ることで、本プログラムに参加したことが「仮想留学体験」となり、ぜひいつか弘前大学に留学して、この人たちがいる食堂にご飯を食べに行きたいと思うようになる。つまり、弘前大学というリソースを語学プログラムに取り入れることによって、弘前大学の未来の留学希望者を増やす効果にもつながるということである。

3.1.4 第2課「大学紹介」タスク

第2課のタスクとして以下のようなものを課題として受講生に課した。

タスク1-1: あなたの大学の①と③の写真を撮って、下↓にはりつけてください
(Paste your photos to ↓)。

①の写真

③の写真

図9 第2課「大学紹介」ワークシート p.2

本タスクは、受講生の在籍する大学の正門の写真と学章の写真を撮り、貼り付けて提出するというタスクである。さらに、次のタスクを下に示す。

タスク1-2: あなたは、大学までどうやって通っていますか？下の□から選んで書いてください。

わたしは、大学に⑤ _____ 行きます。

例: 自転車で バスで 車で 歩いて 電車で (その他) _____ で

図10 第2課「大学紹介」ワークシート p.2

タスク1-2は、通学的手段を受講生に聞くものである。ここで使われる「(場所)に(交通手段)で行きます」というのは、初級日本語の中の一つの文型項目で、初級の初期に学習者が学ぶものである。次のタスクを示す。

タスク1-3-1-4: あなたは、大学で何の授業を受けていますか。日本語で書いてください。(Ask your tandem partner that how to say it in Japanese)。

①一番好きな授業:

どうしてですか? _____ から。

②一番勉強になる授業:

どうしてですか? _____ から。

③一番難しい授業:

どうしてですか? _____ から。

図11 第2課「大学紹介」ワークシート p.3

タスク 1-3 は、弘前大学の教室で、はやぶさ生が「ここで何の授業を受けますか？」「専門や、外国語の授業を受けます」という会話をする動画を見て行うタスクである。ここでは、①一番好きな授業、②一番勉強になる授業、③一番難しい授業について、それぞれ理由を聞くものであるが、これは、受講生が自身の大学で受けている講義の名前を日本語で言うかどうか、理由を尋ねる質問に対しては、「楽しいから」、「おもしろいから」、「むずかしいから」など、簡単な形容詞を使う練習にもなることを意図したタスクである。

次のタスクを示す。

タスク2: あなたの大学の売店で売っているものを5つ書いてください。そのうちの、2つを写真に撮ってはりつけて(paste!)ください。

① ② ③ ④ ⑤

The unique things that you can buy at a shop in your university.

--	--

図 12 第2課「大学紹介ワークシート p.5

タスク 2 では、受講者の大学の売店で売っているものを 5 つ日本語で書き、そのうち 2 つを写真に撮って貼り付けるといった課題を課した。自分の身の回りの物を日本語で何と言うかを学ぶ意味と、写真の枠の上に書いてあるように「The unique things that you can buy at a shop in your university」として、第2課の教材動画に出てくる弘前大学にしか売っていないもの（アップルスナックとリンゴゼリー、弘大 T シャツなどの大学オリジナルグッズ）のような、受講者の大学のオリジナルグッズなどを探して紹介できるようになることを意図したタスクである。

タスク4. 以下の質問に答えてください。

1. あなたは、いつもどこで昼ご飯を食べますか？

2. あなたの大学の食堂のメニューで一番好きなメニューはなんですか。そのメニューの写真を撮って下にはりつけてください。

2-1. メニューの名前(あなたの言語とカタカナでの読み方)

図 13 第2課「大学紹介」ワークシート p.9

タスク4では、受講生が昼ご飯をいつもどこで食べるかを聞き、受講生の大学の食堂のメニューの写真を撮り、そのメニューの名前とどのような料理か日本語で書くことを指示している。

以上のように第2課は、弘前大学の学生の生活と、受講者自身の大学生活を比較する機会となるように課題を設定している。このようなタスクに取り組むことによって、「語学の勉強」という意味を超え、「自分自身を表現するツール」としての言語の役割について認識を新たにする効果と、文化を比較し自文化を客観的に見る視点を身につける効果があると考ええる。

3.2 地域歴史文化資源をリソースとして使用した教材作成

本節では、青森県津軽地域の歴史文化的資源を教材に用いた例として、本教材作成について述べる。

3.2.1 第3課「弘前城」

第3課では、弘前城に出向き、弘前公園内の景色や桜、また弘前城内、公園内の土産店で簡単な日本語を使った会話の動画を撮影し教材にした。以下の図14がその様子である。



図14 第2課「弘前城」「岩木山」についての会話

1. 「弘前公園①」を見て、以下の質問に答えてください。

1. 以下の会話の _____ の部分に言葉をに入れてください。

①

A: あの山はなんという山ですか？

B: あれは、①岩木山です。青森県で、②_____山です。
富士山のようにきれいなので、「③_____」と呼ばれています。

A: 「津軽」はなんですか？

B: 弘前市がある④_____の名前です。

1. ①岩木山は、なんと読みますか。動画を見て、なんと書いたかひらがなで書いてください。

2. 「②_____山」に入ることばを以下の3つの中から1つ選んでください。

a. 一番高い b. 一番低い c. 一番大きい

図 15 第2課「弘前城」ワークシート p.1

図 15 の問題 1 では、弘前で有名な「岩木山」について、「一番高い山」、「津軽富士」などの言葉を使用した会話を聞き、それについて、意味の理解を聞く問題になっている。

この動画を見た後で行うタスクは以下である。

タスク1: あなたの住んでいる④にある②の山の写真をインターネットからダウンロードして①にはってください。(Paste the photo to ↓)。

私の④で、②山の名前: _____ in your language
_____ in Japanese (or katakana)

山の写真

図 16 第2課「弘前城」ワークシート p.2

受講生は自分の大学のある地域・出身地で有名な山や自然について探し、それを日本語でどう呼ぶかを考える。

また、第2課では、弘前城内でもロケを行った。以下の画像がその一部である。



図 17 第3課「弘前城」動画画像

左の画像は、弘前城内に展示されているいわゆる「駕籠」である。「人を乗せて運びました」という初級日本語での解説がされる。右の画像は、弘前城の最上階にある弘前城内の様子を表した模型の前での会話である。「これはなんですか」「これは昔の弘前城です」「部屋がたくさんありますね」という会話がされる。この動画を見て行うタスクは以下である。

6. A.弘前城、B.大坂城、C.名古屋城をインターネットで検索(search)して、写真を一枚コピーして以下にはりつけてください。それぞれ、有名なものを調べて書いてください。

例 A 弘前城



弘前城は、桜(さくら)で有名です。

図 18 第3課「弘前城」ワークシート p.4

<p>タスク 2.あなたの国の「昔の乗り物」について調べて下に写真をはって、説明(explanation)してください</p> <p>い</p> <p>昔の乗り物の写真</p> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 500px; margin-top: 10px;"></div>

図 19 第 3 課「弘前城」ワークシート p.6

図 18 は、「弘前城」、「大阪城」、「名古屋城」を例に挙げ、日本の「城」文化について受講生が調べる課題である。図 19 のタスクでは、受講生の国の昔の乗り物について調べ、その使い方について日本語で説明するよう指示している。

これらは、日本の歴史文化について、特に、弘前大学周辺の歴史文化を、日本語学習の「リソース」として使用した例である。受講生は、このようなタスクに取り組むことを通して、日本の歴史文化についての知見を増やすのみならず、その地に行かなければ見られないものを、ぜひ将来的に自分の目で見てみたいと思うことだろう。また、同時に自身の国や地域の歴史文化について振り返ることによって、自身のアイデンティティについても認識するきっかけを作ることにもつながるであろうと考え、このようなタスクを繰り返し本教材では設定した。

3.2.2 第 4 課「津軽塗」

本節では、本コースの中では少々趣を異にする第 4 課「津軽塗」について説明する。

津軽地方には先にも述べたように津軽塗やこぎん刺し、金山焼、津軽びいどろ等、様々な伝統工芸がある。これらの中から何かを今回のサマープログラム日本語コースの中にトピックとして取り上げようと思ったが、本サマープログラムの日本語コース以外の日本歴史文化コースでそれらについては取り上げられていること、日本語コース開発の準備期間は 1 カ月弱しかなく、地元の工房などに筆者自身つながりを持っていなかったため、特定の文化的資源についての課を設けることは断念していた。

しかし、上述の第 3 課の動画作成のために弘前城にロケに訪れた際、そこで開催されていた「さくらまつり」に出店していた津軽塗の工房があり、津軽塗の土産物や様々な商品を見て、これを教材に利用できたら、受講生にとって大変有益だと思い、飛び

込みでその工房の店員さんと専務さんにお願ひし、教材作成に協力していただくこととなった。

アポイントも取らず突然押しかけ、動画に出演してくださいとお願ひするという礼を欠いた依頼であったが、工房の方は「留学生のためになるなら」と即座に快諾してくれ、本コースの第4課のテーマとして「津軽塗」を取り上げることが可能になった。

このような経緯で予定外に撮影ができたが、本動画はその他の課のように、はやぶさ生が初級者向けにコントロールした日本語で会話しているところを撮影した動画ではなく、大学生でも教員でもない一般人である工房の方が、日常話している普通の日本語で津軽塗の特徴や工程について説明している動画となった。

つまり、この動画内で話される日本語は、サマープログラムの受講生にとっては、大変難解な日本語であるということが予想された。しかし、当初から述べているように、学習者が日本語学習に利用できるものはすべて「リソース」となると考えれば、コントロールされていない日本語会話も、学習者にとっては大変貴重な教材となるはずである。また、本動画に出演してくださった津軽塗の工房の店員さんと専務さんは、受講生がいつか当地弘前に留学に来られた際、「実際に会えるかもしれない人」となる。第2課で登場してくれた弘前大学の食堂の店員さんたちと同様、一緒に勉強する学生以外で、地域社会の中に、留学生との関わりを持ってくれる人がいることを、留学前に知ることができる機会というのは、普通外国語を学ぶ学習者にとってそうそう訪れるものではない。このように考え、本動画を使用した教材に様々な工夫を加えることによって、受講生にとっては理解可能であり、なおかつ、地域の伝統工芸についての勉強もでき、さらに、何かを作る際の工程を説明するときの初級日本語も学べるような教材になるよう、教材作成を行った。

以下が第4課「津軽塗」で使用した動画の画像の一部である。



図 20 第 4 課「津軽塗」動画画像

本動画を基に作成したワークシートの課題は以下である。

「津軽塗」の動画を見て、以下の質問に答えてください。

1. 「①」を見て、以下の質問に答えてください。

1. 以下の会話の _____ の部分に言葉を入れてください。

高橋：お店に入っていきます。

① _____ が、あります。

ここには、② _____ や、③ _____ があります。

店員：これも映しといて。

高橋：はい。これはなんですか。

店員：オリンピックの、オリンピック連盟でちゃんと公認された、

高橋：あの、説明、もう一回してもらえます？

店員：A あの、日本オリンピック協会から公認された、ですから、勝手に作って勝手に売れない、
届け出して、何個作りますよ、何個売りますよ、という意味で、限定で作ってる。

高橋：はあ、なるほど。

店員：で、これ、速さにするとこれ④ _____ になる。

高橋：ああー、ほんとだ。これは、Mt.Fuji、④の、形になる、認定の、
オリンピックの、津軽塗です。

1. ①～④に入ることをばを聞いて下へ書いてください。

図 21 第 4 課「津軽塗」ワークシート p.1

図 21 の場面は、店員さんに、2020 東京オリンピック公認の津軽塗の茶碗について説明してもらっているところである。聞き手は筆者で、会話形式になっている。「連盟」

や「公認」、また、「勝手に作って勝手に売れない」「届けを出して」など、会話に登場する日本語のレベルは上級以上である。

そこで、第1課～第3課では用いなかった「単語調べ」の学習方法を第4課から導入し、各受講者が辞書を引き、単語の意味を調べる作業を行い、文法はわからずとも、出てくる単語の意味を理解できれば、会話の中で何を言っているかわかるようにした。また、ちゃんと理解できているかどうかを確認するために、店員さんが話した言葉の一部を、英語訳⁽³⁾するような問題も作った。本動画についてのタスクは以下のようにした。

タスク1 「2020東京オリンピック公認グッズ」を検索(search)して、好きなものの写真を一つコピーして下にはりつけてください。それは何か、何に使うものかの説明を日本語でしてください。

Ex :



例：これは、東京オリンピック認定の津軽塗のちゃわんです。中に、ごはんを入れて食べます。

図 22 第4課「津軽塗」ワークシート p.4

本タスクは、「これは、(名詞)です。～に使います」という初級日本語の練習にもなっているが、ちょうど東京オリンピック開催の年に本プログラムの実施が重なったこともあり、また、この津軽塗のように、東京オリンピックの公認グッズは、日本の伝統工芸品や日本文化を代表するようなものが多いことから、海外の日本語学習者にとっては、このようなオリンピック公認グッズを探すことも、日本文化の勉強になると考えた。

次に、津軽塗の特徴や工程について工房の専務さんが説明してくれたところを撮影した動画の一部を示す。



図 23 第4課「津軽塗」動画画像

本動画を見て、答える問題は以下である。

II. 「津軽塗②」を見て、以下の質問に答えてください。

1. 以下の会話の ①の部分に言葉を入れてください。

②

高橋： えーこちらが、石岡工芸の、石岡さんです。

えー、「津軽塗」のご説明をお願いできますでしょうか。

石岡： はい。えー「津軽塗」は、えー ① っていう① がありまして、えー、色漆をたくさん塗り重ねて、削って、その削を出すっていう技法、なんです。

です、あ、すごく自由度が高くて、柄付けも自由にできて、色も、たくさん種類があるので、いろいろな色を組み合わせて、あの津軽塗の、柄を、作ることができるんですね。です、例えば、グリーンだったり、ベージュだったり、もう、色を、この色を変えるだけで、どんどんパリエーションがでちゃう、っていうあの美しい、津軽塗なんです。

です、あの下地から作っていくと、約48工程の、工程があって、2か月半〜3か月で、商品が出来上がるっていう、たいへん、あの、手間のかかる、塗り、技法になります。はい。

高橋： はい。わかりました。ありがとうございました。

1. Ishioka-san said "TSUGARUNURI" is also known as ①. ①は「津軽塗」の「alias', 'also known as-」という意味だという日本語を言っています。①はなんと言ったか、下の4つの中から選んで正しいものを1つ選んでください。

a. せつめい b. あだな c. べつめい d. みょうじ

図 24 第4課「津軽塗」ワークシート p.5

図 24にある会話のスク립トを見ると、「研ぎ出し変わり塗」、「別名」、「色漆」、「削る」、「層を出す」、「自由度が高い」、「柄付け」など、初級者には難解な単語が並んでいる。これらの理解ができるようにするため、受講生に、青森県漆器協同組合連合会が提供しているホームページ⁽⁴⁾にある英語による津軽塗の説明動画を見るよう指示し、英語によって津軽塗について理解することを先にさせ、そのあと、日本語の動画に戻って復習するように指示した。

第4課のタスクは以下のようなものである。

4. 以下は、津軽塗の作り方の説明です。

1. まず最初に、色漆をたくさん塗り重ねます。First, apply some colors.
2. 次に、いろいろな色を組み合わせせて柄を作ります。Second, mix some colors and make the pattern.
3. 最後に、削って、柄を出します。Finally shaving the surface.

練習：

タスク2 自分の国・地域の伝統工芸品について調べて、写真を2～3枚はり、特徴と作り方の説明を日本語で書いてください。作り方を説明をするとき、「まず最初に、～します。次に、～します。最後に、～します」という文を使ってください。

図 25 第4課「津軽塗」ワークシート p.8

本タスクに対する受講生の回答は、筆者にとっても大変興味深いものであり、オンラインのオンデマンド教材でありながら、受講生の言いたいことがよく伝わってくるものであった。以下にいくつか受講生の回答の写真を挙げる。



タイ「パーマイナーポー」(シルク)



アメリカ「スクリムショー」
(クジラの歯や骨などを材料とする工芸)



中国 切り絵



チリ「クルツルーン」(楽器)

図 26 第4課「津軽塗」タスク2に対する受講生の回答

受講生はそれぞれ、自分の国の伝統工芸などを探し、日本語の音にすると（カタカナにすると）どう発音されるのか、工程を説明するには、どんな動詞を使えばよいのかなど、一生懸命考えてこれらの説明文を作ってくれたことが見て取れた。

このように、第3、4課では、「文化」の中でも特に「歴史文化」や「伝統工芸」について取り上げて課題を作成した。先にも述べているように、このように地域資源を語学教育における「リソース」として扱うことは、教室から学習者を開放し、生活の中で「日本語使用者」として日本語を使用することにつながる効果があるだけでなく、日本の歴史文化、特に、留学先の候補となる大学周辺地域の文化に触れることで、日本文化についての知見が深まることに加え、その伝統文化を有する地域にある大学への留学を希望する動機にもなりうると考える。

4. まとめ

以上、2021年弘前大学サマープログラムで筆者が担当した日本語コースにおいて作成した教材について、「リソース」の考え方をを用いて考察してきた。

本教材が学習者に与えた影響として、授業評価アンケートの結果の一部を以下に示す（【 】は質問（原文は英語）、回答は英語日本語どちらでもいいと指示している）。

【第4課「津軽塗」に対するコメント】

・ This part showed us around the Tsugaru Nuri-chap. The traditional Japanese craft.

【本コースのベストポイントはなんですか？】

- ・ Being able to immerged in Japanese language and Japanese culture.
- ・ I am very happy to learn about the beautiful Hirosaki City and its art crafts.

【本コースを通して、弘前市周辺地域や弘前大学に興味を持ちましたか？】

- ・ はい。(100%)

【本コースを通して何を学びましたか？】

- ・ Too many things, a lot about hirosaki.(原文ママ)
- ・ I can know more about Hirosaki city and Aomori prefecture, and learned about the lifestyle and attitude of people who born and raised in different country with me.
- ・ Through this course, my listening ability was greatly improved and my vocabulary was expanded. I also learned interesting Japanese culture. It broadened my horizon and let me see the similarities and differences between Japanese culture and Chinese culture.

【担当講師に一言メッセージをお願いします】

- ・ I hope to visit hirosaki someday! See everything that was in the videos first hand!
(原文ママ)
- ・ I'm truly thinking about maybe, taking a major in Hirosaki University.

受講生たちは、本コースを受講し、弘前や弘前大学に強く興味をひかれたということがアンケートからわかる。このように、日本人にとっては、またはその地域に生活する人にとっては当然そこにあるもので、普段興味を持って考えることもないことで、日本語を学ぶ世界の外国人学習者から見れば、大変魅力的で価値のあるものであることがわかる。

今回の日本語コースの教材の作成は、はやぶさ生はじめ、弘前大学で働く人（売店、コンビニ、生協などに撮影許可をいただいた）、津軽塗の工房の方、弘前城公園でのロケを許可していただいた市役所公園緑地課、弘前城内の土産物店など、様々な方の助けなしにはなしえなかったことである。本教材を企画・作成し、提携大学の外国人学生対象に授業を実施することを通して、筆者自身も、地域につながりを作ることができ、また、大学周辺の地域の人々が、日本文化を世界に発信したいと思っていること、留学生のためには、喜んで協力してくださることを知った。

また、付け加えて言えば、工夫次第で、オンラインの完全オンデマンド教材も、インタラクティブを生み出す仕掛けづくりの一つの方法として使うことができることが示されたと考える。受講者の一人から「このコースはインターアクションのコースで

す！」という感想も聞かれるほど、紙面上でのやりとりだけでも、教員と学生が国や時差を超えてつながり合い、意見を交わし、お互いの理解を深めることは可能であるということを示唆していると考ええる。

今回明らかになったオンライン教材の可能性はまだまだ発展の余地があると思う。津軽地方のように、日本の歴史文化的な資源が豊富な地域では、それを「リソース」として、教育に役立てていく方法はさまざまに考えられるものであると思う。

今後も、今回の成果を発展させ、地域資源を活用した語学教育教材やプログラムの開発、研究に取り組み、大学生や留学生が、地域と世界をつなぐ架け橋となるような事業を展開していきたいと考える。

注

(1) ここで言う「受講生」とは、「2021 年弘前大学サマープログラム」を受講した、弘前大学と交流協定を結ぶ海外の大学に在学する大学生のことを言う。これまで「留学生」と呼んできたいわゆる（日本に留学する）外国人留学生」は、日本に実際に来て留学する留学生のことを想定しており、サマープログラムの受講生は、コロナ禍により来日できていない。以上のことから、サマープログラムに参加した海外の学生については以降「受講生」と呼び、「留学生」とは呼ばないこととする。

(2) ACTFL-OPI(American Council on the Teaching of Foreign Languages(米国外国語教育協会)ACTFL)が行っている Oral Proficiency Interview(口頭能力判定テスト)OPI)における初級中～中級下のレベル。詳しくは鎌田他(2020)参照。

(3) サマープログラムの受講生の国籍は様々だが、本プログラムの他の 2 コースは英語による授業であるため、受講生は高い英語力を持っていることが分かっている。

(4) 青森県漆器協同組合連合会 HP <https://www.tsugarunuri.org/>

参考文献

岩崎千晶(2021)「高等教育におけるオンライン授業の設計」『関西大学高等教育研究』(12) pp.139-147 関西大学教育開発支援センター

内丸裕佳子(2013)「中級後半および上級前半の学習者を対象とした地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第3号 pp.116-124 岡山大学教師教育開発センター

国立大学協会国際交流委員会(2021)「コロナ化を契機として考える今後の国際交流の在り方について」<https://www.janu.jp/wp-content/uploads/2021/03/20210222-wnew-nextintlexch.pdf> (最終閲覧日 2021 年 10 月 29 日)

小林明(2011)「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」『留学交流』(2)pp.1-17 日本国際教育協会

末松和子(2017)「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる：国際共修を通したカリキュラムの国際化」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』(3) pp.41-51 東北大学高度教養教育・学生支援機構

田島弘司(1995)「地域社会における日本語教育の進展—その必要性と今後の課題」『'95年度日本語教育学会春季大会発表集』

田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店

トムソン木下千尋(1997)「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育』(7) pp.17-29 国際交流基金日本語国際センター

中島祥子(2013)「多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び—留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから—」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』65 巻 pp.133-148 鹿児島大学

Lee, C. S., Therriault, D. J., Linderholm, T. 2012. On the Cognitive Benefits of Cultural Experience: Exploring the Relationship between Studying Abroad and Creative Thinking. *Applied Cognitive Psychology*, 26 (5). 768-778.

Stebbleton, M; Soria, K; & Cherney, B. 2013. “The High Impact of Education Abroad: College Student’s Engagement in International Experiences and the Development of Intercultural Competencies. *The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*. 22: 1-24